北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

唐朝辺塞詩の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 勝久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004146

北海道教育大学紀要（第一部A）第四十四巻　第一号　平成五年七月

唐朝辺塞詩の研究

山田勝久

一　盛唐のシルクロード

前漢武帝時における張騫の大月氏への派遣以来、中国の歴代王朝は西域経営を重要視し、中央アジアに存在するオアシス国家と、ある時は和平し、ある時は交戦しつつその勢力範囲を保持するように努力してきた。

唐代の玄宗皇帝の治世中、開元・天宝（七一三―七五五）の頃には、その経営地域は最大規模に達しており、北庭都護府は庭州に置かれ、敦煌の陽関・玉門関からアラル海一帯までを支配下に治めていた。また、安西都護府は亀茲に置かれ、于闐・疏勒・碎葉までの広範囲な地域を統割していた。

こうした西域経営の中で、唐王朝が心を痛めていたのは、回鶻（ウイグル）・吐蕃（チベット）・大食（サラセン帝国）の存在であった。なかでも大食は西方の一大強国であり、オアシスの都市国家にとってはどちらに帰属するかが大問題であった。高仙芝の率いる唐軍がタラスの戦（七五一）で敗北してからは、西域三十二国と言われた小国家群は、西方よりしだいに大食の勢力下に入っていった。

玄宗朝における唐軍の駐兵は、約四万四千人であったが、広大な中央アジアの実状から見れば、点と点を支配しているにすぎない。また、長安からあまりにも離れており、こうした地理的条件が支配を困難にしていた。

今一つ、西域の特色として重要な視点を述べるならば、盛唐期の中央アジアの住民の連帯意識の欠如である。四世紀から六世紀にかけての西域は、異民族が雑居しつつも共に協調し、生命の尊厳とシルクロードの平和往来を支えようとの熱意が脈動していた。こうした平和共存の思想をもたらしたのは、大乗仏教の伝来であった。四世紀末には、シルクロードの民の八割が仏教に帰依し、石窟寺院の壁画や仏像、また出土する古文書に示されるように、仏教東漸の流れの中で絢爛たる庶民文化の華を咲かせていた。

こうしたシルクロードの平和と繁栄は、文学作品のいたるところに詠出されている。二、三事例を引けば、

雪嶺千清漠、雲楼架碧空
重開千仏刹、旁出四天宮
瑞鳥含珠影、霊花吐薫襄

洗心遊勝境、従此去鹿蒙
（沙州敦煌二十詠、其三）

二月仲春色光輝、万戸謌謡総展眉
太保応時納福祐、夫人百慶無不宜
三光昨来転精輝、六郡尽道似堯時
（ペリオ文書、三五〇〇号　張議潮頌歌）

参拾珠頬美少年、紗窓擇鏡整花鈿
牡丹時節邀歌謡、撥棹乗船採壁連
（女人百歳篇）

人間賛歌の歴史舞台、流沙の彼方の桃源郷と言われたシルクロードも、唐代の中頃から末期にかけて、急速にその光を失っていった。その最大の原因は、「権威の悪侶」が「真心の民衆」を奴隷化したことにある。僧は経典の所説にかこつけて低俗なことばかりを語り、金品を集めるのに狂奔し、民衆は寺院の労働力として隷属していった。寺戸という寺院直属の身分の住民は、移転の自由も一般住民との結婚も許されなかった。寺僧は法を説くことを忘れ、幅広く高利貸しを行い、発見された寺院の収入決算をみても、第一位の収入は高利貸し収入というあり様であった。また僧侶の民衆蔑視が人々の仏教への信頼感を失なわせ、イスラム化へと傾斜させていったのである。こうした論拠を示すものとして、

スタイン文書　六〇六六号
スタイン文書　五六九八号
スタイン文書　三八七七号紙背
ペリオ文書　三二一一号
ペリオ文書　三二一四号紙背
ペリオ文書　二〇三二号紙背
ペリオ文書　三二三四号

等があげられる。その他、借金が積って身動きできなくなり、子供を売り身を質に入れて、奴隷として生きる苦悩を綴った文書も数多く出土している。すなわち、七世紀以後のシルクロードの繁栄の影には、民衆の悲哀と苦悩が随所に見られるのである。

唐代の西域のオアシスには、形式にとらわれ、仏教の本質を見失った僧侶が多く存在し、民衆から布施を強要し続けた。出家者にとって住民は〝法を求める一個の人間〟というよりも、〝しぼり取るだけしぼり取り、用が済めば捨て去る〟という布施製造機と映っていたようである。苦しみにあえぐ民衆は、水で飢えをしのぎ、夜ごと寒さにふるえていた。

そうした住民の苦悶をよそに、僧たちは毎夜のごとく役人を接待し、酒宴を繰り広げていた。驚くことに唐代末の敦煌は、人口二万人たらずのオアシスであるのに、約千人の僧尼がいた。二十人に一人は出家者という異常構成であり、金銭に狂う僧たちは、権威にへつらい素朴な民衆を次々と奴隷化していった。しかし、こうした理不尽な仕打ちに対し、敦煌の住民が立ち上がり、戦った時期もあった。スタイン文書五八二八には、「規約以外に布施を強要することはできない」との誓約を勝ち取った事実が見られる。しかし、在家に良き指導者がいなかったため、すぐに破棄されてしまい、再び暗黒時代が続くことになってしまった。

唐代から宋代にかけては、航海技術の発達により、交易ルートとして南海路の重要性が高まり、相対的に陸路（オオシス路）の必要性が低下していた。また、民族意識の高まりにより、諸民族融合の象徴であったシルクロードが各地で分断され、随所に国境の税関が設置されるようになった。さらに、イスラム教徒の侵入など、西域の混乱と衰亡には、さまざまな原因があげられる。

私は一九九三年までの間、十五回のシルクロード調査を体験し、カシュガル・ウルムチ・トルファン・楼蘭・敦煌・酒泉・蘭州などの古文書を現地で見ることができた。それによると、歴史はありありとシルクロードの興亡の要因を明示し、本質を映し出していた。シルクロードが文明の墓場となった最大の原因を、一言で表現するならば「内部の腐敗と堕落」によって滅亡したと断言できる。すなわち、唐代の西域史、それは聖職者の権威に抑圧された民衆の悲惨な歴史でもあったのである。

盛唐の辺塞詩人、岑参の二度に渡る西域行は、まさにこうした世相の中で実施された。次に岑参の作品を通し、その旅程の変遷と彼の文学の特色を探ってみよう。

二　岑参の家系、及び少年時代

岑参は玄宗の開元三年（七一五）仙州に生まれた。新旧唐書には、岑参の経歴についての記載はない。岑参の「感旧賦」の序にのみ、次の如く述べられている。

国家六葉、吾門三相矣

六葉とは、高祖から玄宗までの唐王朝六代の皇帝を指し、三相とは、曽祖父の岑文本・伯祖父の岑長倩・伯父の岑羲が大臣になったことを言う。祖父の岑景倩は、衛州の刺史、宏文館学士であった。父の岑植は科挙明経科に合格し、多くの官職を歴任したのち、仙州・晋州の二州の刺史となったが、岑参が九歳の時に死去している。そのため家運は年ごとに傾斜し、岑参は少年時代から青年時代にかけて、極めて貧困であったという。

岑参の幼い頃の作品は、王維の少年時代の詩風に類似している。伝統的な作詩技法によって、自然描写と叙情精神を詠出したものが多く、平凡な作品ではあるが、後世の辺塞詩人としての端緒を見ることができる。

看君尚少年、不第莫悽然
可即疲献賦、山村帰種田
野花迎短褐、河柳払長鞭
置酒聊相送、青門一酔眠

（送胡象落第帰王屋別業）

岑参の兄弟は五人で、彼は三男であった。主として兄について作詩の技法を学習した。十五歳の時、住居を潁陽に移しさらに学問に精励した。十六歳の時、初めて長安の都を訪れ、以後、約十年の間、科挙の進士科合格を目指して受験勉強に取り組むと共に、長安を訪問して貴顕の屋敷に出入した。進士[1]合格こそ経世的壮志と、己が栄光の人生を開く唯一の道であると確信していたからである。

二十六歳の時に諸国を歴訪し、多くの名所旧跡を見学している。河頗・邯鄲・井陘・貝丘・冀州・匡城・鉄丘・滑州など、非常に広

範囲な旅であった。仕官のためには机上の学問もさることながら、旅によって見聞をひろめ、詩才を磨くことが肝要である。

岑参が進士科に合格したのは、天宝三年（七四四）三十歳の時であった。第二位で及第した岑参は、その年、右内率兵曹参軍を授けられた。これは兵器の管理をする仕事で、官位は正九品下、予想より微官であったが、不遇感を甘受しつつ職務に勤めていた。流浪や無官がいかに精神を荒廃させるかについては、三十歳になって就職できた岑参にとっては身をもって知悉することであった。当時の心象風景を垣間見る作品に「初授官題高冠草堂」がある。

三十始一命、宦情都欲闌
自憐無旧業、不敢恥微官
澗水呑樵路、山花醉薬欄
祇緑五斗米、孤負一漁竿

あまりにも下級の官であるので、仕事への熱情が欠如してくると歌う。しかし、陶淵明のように退職するわけにもいかず、五斗米のために腰を折って宮仕えする岑参の悲しみが、良く詠出されている作品である。

岑参が進士に及第した年、すなわち天宝三年は、杜甫が李白と会った時であり、安禄山が范陽節度使を兼ねた年でもある。翌年八月には、楊太真が貴妃に冊立され、その一族が官爵を授けられ恩賜をこうむり始めた。さらに、岑参が第一回目の西域行となる天宝八年までの間は、楊氏一族の豪貴と驕慢が極まり始めた時節と合致する。陳鴻の「長恨伝」は、この間の社会を次のように描写している。

叔父昆弟皆列位清貴、爵為通侯。姉妹封国夫人、富埒王宮、車服邸弟、与大長公主侔矣。而恩沢勢力、則又過之。出入禁門不問、京師長史為之側目。故当時謡詠有云、生女勿悲酸、生男勿喜歓。又曰、男不封侯女作妃。看女郤為門上楣。其人心羨慕如此。

（太平広記、巻四八六）

これは安史の乱のあと、元和元年（八〇六）の作であるので、当時の世相をそのまま描写したものでない。しかし、わずか五十年後の記述であるので、十分に社会状況を明示し得た資料といえよう。

岑参の如く、科挙に合格して官僚になったとはいえ、強力なパトロンもなく、かつまた財力のない一青年にとって、混迷しつつある宮廷での昇進[2]は不可能に近かった。岑参は楊一族の抬頭する官界にあって「孤り一漁竿を負わん」と詠むなど、無感動な歳月を積み重ねていくのであった。ただ彼の胸中に一条の光を与えるもの、それは多くの友人との対話であり、沈思の果てに名詩が誕生した時であった。すなわち、青年時代の岑参にとって熱情をそそぐもの、それは詩道の追求であったと考えられる。

三　「胡笳歌　送顔真卿使赴河隴」について

天宝七載（七四七）頃になると、岑参の名も長安の人士の中で少しづつではあるが知られるようになった。のち、唐代の文人杜確は『岑嘉州詩序』の中で「一篇、筆を絶つごとに、すなわち人々伝え写す。閭里の士庶、戎夷蛮貊といえども、諷誦吟書せざるはなし」と

述べているが、この時期がその端緒と言えよう。

かつて白楽天の親友元稹は『白氏長慶集』の序文で「二十年間、禁省・観寺・郵候の牆壁の上、書せざる無く王公・妾婦・牛竜馬走の口、道はざる無し」と述べたが、岑参の評に記された「戎夷蛮貊」との空間的な広がりに及ばない。

岑参の名を名実ともに高くしたのは、河西に赴く顔真卿を送るために作った贈別詩「胡笳歌 送顔真卿使赴河隴」である。

君不聞、胡笳声最悲
紫髯緑眼胡人吹、
吹之一曲猶未了
愁殺楼蘭征戍児
涼秋八月蕭関道
北風吹断天山草
崑崙山南月欲斜、
胡人向月吹胡笳
胡笳怨兮将送君
秦山遙望隴山雲
辺城夜夜多愁夢
向月胡笳誰喜聞

顔真卿は（七〇九―七八五）顔体字の創始者としても名高い書家であり、唐朝四代の皇帝に仕えた名臣である。安禄山の反乱の時、敗北の続く官軍において、義兵を率いて抵抗したことでも知られる。この詩は、彼が河西隴右軍試覆屯交兵使として、河西（甘粛省武威）と隴右（青海省楽都）に出発するに際し、友人である岑参が送別の宴で歌った作品である。

胡笳は漢代から唐代にかけて、西域一帯に流行したもの悲しい音色を出す異民族の木管楽器である。はじめは葦の葉を巻いて吹いていたが、やがて改良が加えられ竹や木でも作られるようになった。

私はまず詩題に注目したい。中野美代子「岑参の塞外詩――その発想の一類型」[3]では『この詩題の形式は送別の歌に多く用いられ「……歌（奉）送……」のかたちをとる。かかる場合、「……歌」があくまでも主題であって、「……送……」というのは、その主題よる詩を発想した動機、すなわち送別という詩作の状況をしめすサブ・タイトルでしかない。』と述べている。

こうした類型の詩題は、岑参の独創ではないにしろ、彼にとっては極めて清新なイメージの発露であったと推察される。のち、北庭都護府に向う時などは、次のような作品を読んでいる。

「輪台歌 奉送封大夫出師西征」
「白雪歌 送武判官帰京」
「天山雪歌 送蕭治帰京」
「火山雲歌 送別」
「秦箏歌 送外甥蕭正帰京」

また、こうした歌行体と同じ系譜に属する作品として、

「走馬川行 奉送出師西征」
「熱海行 送崔侍御還京」

がある。さらに岑参の詩集を調査したところ「〇〇歌送……」と題

した作品は次の如くである。

「敷水歌　送竇漸入京」
「青門歌　送東台張判官」
「梁園歌　送河南王説判官」
「函谷関歌　送劉評事使関西」

岑参の「〇〇歌　送……」との歌行体を用いての送別詩は、唐代の詩人たちの詩題を見た時、きわめて特色ある趣向である。たとえば「〇〇歌」の場合は、「石魚湖上酔歌」(元結)・「漁父歌」(張志和)・「美人梳頭歌」(李賀)・「聞歌」(李商隠)・「子夜呉歌」(李白)・「涼州歌」(張子容)等々、数多く見ることができる。また「送……」については無数の作品がある。しかし、「〇〇歌　送……」との詩題は、岑参の送別詩がはしりをなすものといえよう。その先駆となった作品が「胡笳歌　送顔真卿使赴河隴」であることを考えると、その文学史的意義は大きいものがある。

この詩が作られた時、岑参は長安の都において、下級官吏として奉職していた。言うならば、西域を詠んだこの送別の詩は、まだ見ぬ中央アジアの風物を想像して詠んだのである。その他、臨場感あふれる筆致で歌いあげた唐朝辺塞詩の一角は、西域に一度も足を踏み入れたことのない詩人たちによって占められている。詩人の優れた英智が、異域の風物や駐留兵士の心情を鋭く想察し得たのである。たとえば、

朔風吹葉雁門秋
万里烟塵昏戍楼
征馬長思青海上
胡笳夜聴隴山頭　(涼州歌　張子容)

葡萄美酒夜光杯
欲飲琵琶馬上催
酔臥沙場君莫笑
古来征戦幾人回　(涼州詞　王翰)

白草原頭望京師
黄河水流無尽時
秋天曠野行人絶
馬首東来知是誰　(出塞行　王昌齢)

北海陰風動地来
明君祠上望龍堆
髑髏尽是長城卒
日暮沙場飛作灰　(塞下曲　常建)

黄河遠上白雲間
一片孤城万仞山
羌笛何須怨楊柳
春光不度玉門関

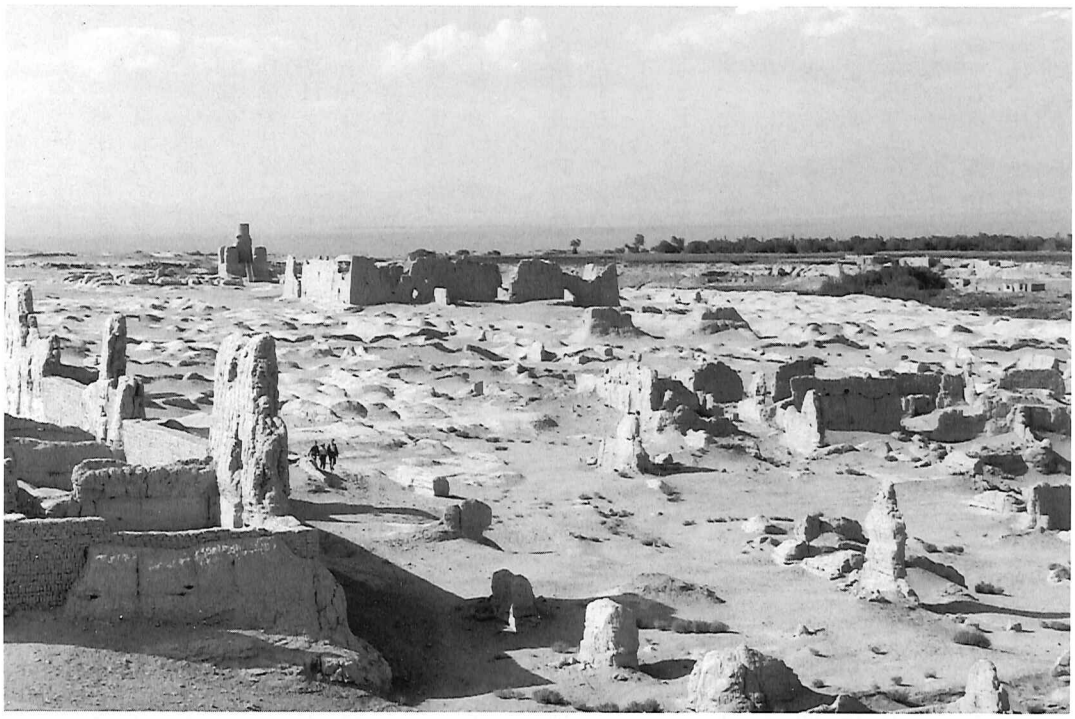
（涼州詞　王之渙）

辺塞詩の名作の多くは、西域を直接踏査したことのない詩人たちによって誕生した。帰還兵士からの伝聞と、西域から長安に移り住んだ胡人の言動を基盤に成立している。岑参・王維・高適など、実際に西域に足を踏み入れ、現地で詠んだ作品群もあるが、辺塞詩に占める割合は少ない。この「胡笳歌」も、この時点ではいまだ見ぬ空想の世界、虚構の中より誕生した作品である。

野澤俊敬「岑参の辺塞詩についての覚書」では、「岑参の辺塞行は五載に始まった」として「天宝七載の秋には最初の塞外生活を終えて長安に戻っていた」と述べている。しかし、私はこの説には反対である。天宝三載に進士に合格し、やっと三十歳にして仕官できたのである。官界に入るまでの十年余に渡る労苦を経て手に入れた職務、それが右内率府兵曹参軍である。『大唐六典』によれば、勲階・考課・禄俸などを掌るもので、西域出張などあり得るはずがない。棄官しない限り、天宝五載から七載までの二年間を、在籍のまま旅行することは不可能である。ましてや、仕官して二年しか経過していない時期においてである。

唐代は漢代に劣らぬ西域経営を実施させ、トルファンには安西都護府（のち輪台まで進出）が設置され、その北のチムサルには北庭都護府が置かれた。さらに唐の勢力は康国（サマルカンド）やタシュケント（石国）方面にまで及んだ。

唐の長安城[4]には西域の文化のみならず、胡人が多く住み『長安志』巻七によれば、西域人のための宗教寺院も建立され「波斯寺二、胡天祠四」の記録を見ることができる。シルクロードの文物・宗教・風俗、さらには胡人の存在は詩材の拡大をもたらし、多くの詩人に



交河故城（トルファン）（1990年8月　筆者撮影）

新鮮な感懐を与えたことであろう。

唐朝辺塞詩は大きく四分類される。①直接現地で取材し、詠んだ作品。②帰国後、辺塞での体験を回想して作った作品。③都に住む胡人や、帰還兵士の伝聞をもとに詠んだもの。④李白の「子夜呉歌」のように、出征兵士を思う妻の立場を思いやって歌った作品。

岑参の「胡笳歌　送顔真卿使赴河隴」は、③に属した作品である。三十四歳の時、長安に於て友人の顔真卿への送別の宴において、西域の地名を駆使しつつ独創性あふれる構想で詠んだ作品である。次に「胡笳歌」を分析し、その文学性を探ってみよう。

「君　聞かずや」と倒置法の句法を用いて歌い出しているが、作詩の技法から言って、李白の「将進酒」の「君見ずや」と同じく、こうした詠出はよほど自信がないと歌えないすべり出しである。へたをすると詩情が息切れ状態となり継続しなくなってしまう。なお、この場合の「君」は、読者でも不定の相手でもなく、今まさに旅立つ顔真卿を指すことは、松枝茂夫[5]「ふたたび岑参の『胡笳歌』について――『君不見』『君不聞』考」で述べているが、私もこの説に従いたい。

次の「胡笳の声の　最も悲しきを」から終わりまでは、現地の様子を想察した叙述となっている。胡笳の音という聴覚の美は、「紫髯、緑眼の胡人吹く」と、視覚の美へと急転回する。こうした岑参の発想は、彼の文学の特色であり、作品の随所に散見できる。例えば、次の作品は全く同じ詠出の手法を用いている。

汝不聞　秦箏声最苦
五色纏弦十三柱
（秦箏歌　送外甥蕭正帰京）

次の「之を吹きて一曲　猶お未だ了らざるに、愁殺す楼蘭　征戍の児」の句は、「未了」にポイントがある。胡笳の哀音のあまりの深さに、一曲すら聞き終わらないうちに悲愁の情がこみ上げてくるのである。眼前の送別の宴から、詩情は西域へと飛翔するが、長安から楼蘭へと推移された媒介は何かと言えば、それは彼の脳裏に流れる「胡笳の声」である。ただ、詩中で詠まれている「楼蘭」は、実際の楼蘭ではない。

楼蘭はシルクロード咽喉の地で、敦煌郊外の玉門関か陽関を経て、西行十五日にして到着するロプノール西北岸の町である。この楼蘭から、道は二つに分かれる。一つはトルファン（高昌）に出て、天山山脈の南麓のオアシス、カラシャール（焉耆）・クチャ（亀茲）を通過してカシュガル（疏勒）に達する天山南路と呼ばれるルートである。

西域南道と呼ばれる道は、楼蘭から西南に進み、崑崙山脈の北側に点在するオアシス、チェルチェン（且末）・ニヤ（精絶）・ホータン（于闐）・ヤルカンド（莎車）にぬける道である。

どのコースを通るにせよ楼蘭は、通過せねばならぬ重要なオアシスであった。それ故に、この地の帰趨をめぐって多くの民族が争奪をくり返し、楼蘭もまたそれによって数奇な運命にもてあそばれた。

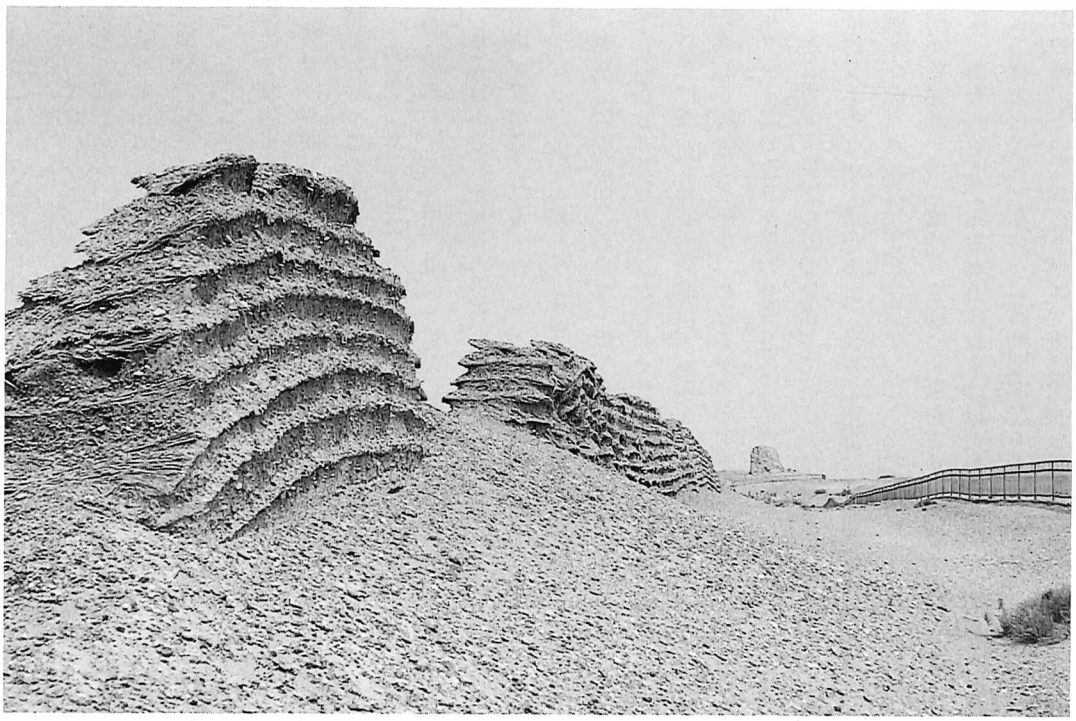
四世紀に入ると、ロプノールに注いでいた水路が南に移り、湖水は水枯れの様相を呈し、町はしだいに衰微していった。東晋の法顕が、三九九年にこの地を通った時には、国王は仏法を信奉しており、四千人の僧があり、すべて小乗仏教であったと『法顕伝』に記している。人口一万五千人前後のオアシスに、四千人の僧が住んでいたことは、住民の生活にいかに大きな負担を強いてきたことか、想像するにあまりある。この四千という数字がどこまで信頼できるか疑

義は残るが、非生産的な階層である僧侶が、法顕の目から見て異常なほど多数いたことを示していたことは疑いない。

六四五年、玄奘がこの町を通過した時「城郭はあれど、人煙はなし」（大唐西域記）と述べているように、すでに町は放棄され廃墟となっていた。岑参が「胡笳の歌」を詠んだのは、天宝七載（七四八）年であるので、玄奘より約百年の歳月が経過している。唐代では、風化土堆群の中に仏塔の残骸と家屋の棟木が、孤影悄然と姿をあらわし、ただ、西域へ通過するための一つのルートとなっているだけであった。

このような楼蘭の状況であるのに、何故に作者は「楼蘭、征戍の児」と詠んだのか。ましてや顔真卿は楼蘭までいくのではなく、甘粛省の西部方面までである。岑参にとって、詩中で詠んだ楼蘭は、往古、中央アジアのタリム盆地の東部、清冽な水をたたえたロプノールの北西に美しく栄えた古都への、時空を超えた憧憬ではなかったであろうか。高昌や亀茲、または安西や敦煌を詠んだのでは、あまりにも現実的すぎて、文学的なイメージが圧縮されてしまうのである。彼の脳裏に浮かんだ詩想には「楼蘭」以外には考えられなかったのである。言うならば、岑参にとっての楼蘭は、シルクロード全般をさしていると考えられ、西域を代表する詩語として使用したと思われる。こうした用法はこの作品に限ったことでなく、唐詩の世界によく見ることができる。例えば、次の詩に歌われた楼蘭も西域の意味である。

青海長雲暗雪山
孤城遙望玉門関
黄沙百戦穿金甲



玉門関から楼蘭への道には、今も万里の長城の土塁が残っている。（1991年 筆者撮影）

不破楼蘭終不還

（従軍行　王昌齢）

次の「涼秋八月蕭関の道、北風吹き断つ天山の草」との句により、岑参の送別の歌は、天宝七載八月に詠まれたことが分かる。顔真卿は蕭関の道を通って河隴に出発したのである。「蕭関」は、現在の寧夏回族自治区固原の東南にあった関所で、西北辺境の要衝であった。長安から西域に向かうには、当時三本の道があったが、顔真卿は最も北よりの蕭関コースをとったのである。この道も唐詩の随所に詠まれている。

蟬鳴桑樹間、八月蕭関道、

（塞下曲　王昌齢）

蕭関逢候騎、都諸在燕然

（使至塞上　王維）

シルクロードの秋は内地よりも早く、八月末から九月にかけては日中は高温であるが、朝夕はこの詩にあるように「涼秋」の趣が深くなり、ステップ路に横たわる天山山脈には北風が吹き流れ始める。この二節における詩語の配置は、文学作品とは思われない厳密さによって構成されている。実体験以前の作とはいえ、西域の地理感覚の正確さと鋭敏さが良くでている。「涼秋（八月）」という季節の設定により「北風」を受け、長安北方に位置する「蕭関」の語は、同じく北方に横たわる「天山」と呼応する。数千キロ離れていることが問題でなく、岑参にとって方向性が重要であった。

同じことが次の句にも言える。「崑崙山南　月斜めならんと欲し、胡人月に向かいて胡笳を吹く」と、「斜・笳」（下平六麻）の韻字を配し、北方から一転して、タクラマカン砂漠の南方の崑崙山脈に浮かぶ月光を詠むとは、何と非凡な詩才であろうか。李白の「戦城南」の地名の配置よりも、はるかに優れている。「崑崙」→「南方」→「月光」、そして「月に向かいて胡笳を吹く」紫髯緑眼の胡人の姿は、静寂の美意識そのものである。視覚と聴覚は完全に一体となり、夢幻の世界は時間と空間を超えて、読者の脳裏に美しく展開する。異国情緒につつまれたところの、詩画一如の世界が具現するのである。

「胡笳　怨みて将に君を送らんとす。秦山　遥かに望む隴山の雲」、現代語訳すれば「月に向かって吹くところの胡笳の悲しい調べで、いま私はあなたを見送ろうとしている。ここ秦山の地から、はるか隴山が雲が望まれる。」と、やがて顔真卿が行き着くオアシスの町で聞くことになるであろう、哀切な胡笳の音で見送るというのである。

西域（絲綢之路）のロマンは、惜別の情と重なりあって、再び都へと引きもどされる。しかし、それは現実のありきたりの別離の悲しさではない。作者の詩想は、蕭関を出て天山に飛び、さらに流沙を越えて崑崙へと巡り、そして今また中原へと帰還した詩情は、シルクロードの香りを漂わせるものへと変化している。

ところで、長安の町で見送っているのに、「秦山」を引用した理由は何であろうか。秦山とは、長安の南部に連る秦嶺山脈のことで、韓愈が詠んだ「雲は秦嶺に横たわりて、家何くにか在る」（左遷至藍関示姪孫湘）の「秦嶺」と同じ山脈をさす。西北の蕭関に旅立つのに、南方の名所である秦山の設定は現実的ではない。地名を隠喩にして詠まなければならない詩的展開でもない。岑参の世界では、地名の頻出という流れを受け、掛け詞的な用法を設定して長安の別送

会場を連想させたのである。すなわち、「秦山を遥かに望む都」と、「遥かに望む隴山の雲」の両意を込めたものと解釈できる。

最後の二句、「辺城　夜夜　愁夢多し、月に向かいて胡笳　誰か聞くを喜ばん」は、塞外での生活の厳しさと、西域に悠久の歴史とロマンを馳せた詩句である。すなわち「喜」は、単なるよろこびではなく、孤愁の美意識と悲哀の旋律に支えられた「喜」である。

なお、この送別の宴席に、実際に胡人が同席して胡笳を吹いていたとする注釈書もある。当時の世相からいって十分考えられる発想であるが、私はこの詩を作った宴席に胡人が出席していたことは、無理な想定であると思う。塞外の地に赴く友を送る時、親交以外の人物、ましてや異国の楽人を呼ぶとは考えにくい。あくまでも純粋な心情をもって、送別の情を詠出しているのである。

以上、「胡笳歌」を見てきたが、ただ単に多くの地名が奔放に出てくるように思われがちであるが、決してそうではない。周到な準備をもって幻想と現実を調和させつつ歌いあげたのである。沈徳潜が『唐詩別裁』で「惜別は言外に在り」と評している如く、胡笳の音色に作者の悲しみを凝縮させたのである。

四　岑参の西域行

岑参が最初に西域に赴いたのは、天宝八載（七四九）三十五歳の時である。安西四鎮節度使の高仙芝が、その年の始めに入朝してきた。微官で生涯を終えるよりは、西域に出向して手柄をたてて栄達の道を歩もうとしたのか、彼は右威衛録事参軍として節度使の幕下に入って安西に出発した。その旅程は残された作品によって推測することができる。

長安――咸陽――隴州――渭州――燕支山――祁連山――粛州――沙州――玉門関――火山――西州――交州城――銀山磧――焉耆――銀山峡――鉄門関――磧西――安西

なお、沙州敦煌から陽関ルートの道は、この頃ほとんど使用されていなかった理由は、楼蘭が滅亡していたからである。そのため関所は役人も不在で、昼も夜も出入りは自由であった。岑参の第一回の西域行は、天宝十載（七五一）の初秋で終止符を打つ。長安に帰った岑参は、友人や知人を通して仕官を試みたがうまくいかなかった。政界は、玄宗がますます楊貴妃の愛に溺れて政治を執らず、翌十一載、宰相の李林甫が死去すると、楊国忠が代わって宰相となり、四十余使を兼ねるというありさまであった。このような官界であったので、賢聖を求める風潮はなく、岑参の栄達どころか、仕官すら見つからない現状であった。

天宝十三載（七五四）四十歳の時、安西四鎮節度使の封常清が入朝し、三月には北庭都護・伊西節度・瀚海軍使を兼任することになった。何とか頼みこんで、岑参は再び都護府に勤務することになったが、封常清にとっては進士に及第した人物が幕下にいればそれにこしたことはなく、自らの権威の誇示にもなる。岑参は大理評事・監察御史となり、安西・北庭節度判官として北庭に赴くことになり、五月に封常清が出発したあと、その後方の遠征メンバーとして出発した。その行程は同じく残された地名によって推察すると、次の如くとなる。

長安――隴山――臨洮――金城――涼州――賀延磧――北庭――輪台

岑参が出征した当時の西域諸国は、ある時は唐軍に帰属し、またある時は大食や吐番に従うといった不安定な政治状態であった。二回の遠征にあって、彼の作品中より西域の様子を垣間見てみよう。

終日見征戦、連年聞鼓鼙
（早発焉耆懐終南別業）

夜静天粛條、鬼哭夾道旁
（武威送劉単判官赴安西行営、便呈高開府）

単于已在金山西、戍楼西望煙塵黒
（輪台歌　奉送封大夫出師西征）

関西老将能苦戦、七十行兵仍未休
（胡歌）

岑参のこうした詩句により、玄宗朝の西域経営は困難な局面を迎えていたことが分かる。こうした緊迫した政治状況は、岑参の作品の随所に散見できるのである。とくに天宝十載（七五二）のタラスでの敗北後は、蕃将で唐軍に叛くものも多くなり、唐軍の前線はしだいに東方へと後退していった。

唐の西域経営をいっそう苦しくさせたのは、天宝十四載（七五五）におきた安禄山の乱である。中央と辺境との連絡がとだえがちになったさまを、岑参は次のように描写している。

春風不曾到、漢使亦来稀
（発臨洮将赴北庭留別）

こうした唐朝の衰退は、大暦十一年（七七五）頃に成立した敦煌出土の文学作品にも詠まれている。

不見中華使、翩翩起虜塵
（沙州敦煌二十詠　望京門詠）

中央政界は乱れ、胡族の抬頭する中では、戦功をたててもそれによって長安にもどされ、栄達が保障されることはほとんど望めなかった。次の詩句はこうした事情をよく物語っている作品である。

朝廷軽戦功、十年祗一命
万里如飄蓬、容鬢老胡塵
（北庭呈宗学士道別）

岑参の前後五年に及ぶ西域での生活は、苛酷な風土に耐えながらも緊張感と新鮮な感動に輝いていた時期であった。彼の五十六年の生涯から見た時、この五年間が最も充実していた期間ともいえる。ただ、第一節で論述したごとく、民族意識の高まりによるシルクロードの分断、僧侶の腐敗と民衆への抑圧による住民の無気力化など、西域文明が退歩する時期に突入しようとしていたことは、岑参詩にも微妙な影を投げかけている。

愁見流沙北、天西海一隅

（輪台即事）

白髪悲明鏡、青春換敝裘

（武威春暮、宇文判官西使還已到晋昌）

辺境での失意の寂しさをこめて、尊き自分の青春を、朽ち果てそうな皮衣と換えたと苦笑する作者は、至徳二年（七五七）四十三歳の晩春、無冠の姿で鳳翔にある粛宗の行在所に入ったのである。

後世、岑参の辺塞詩に対しての論評は、『唐才子伝』・『彦周詩話』・『河嶽英霊集』・『滄浪詩話』・『石州詩話』・『北江詩話』・『漁洋詩話』などがあるが、いずれも唐詩の中にあって異彩を放ち独歩した点を高く評価している。

最後に、沈徳潜の『唐詩別裁集』の一節、すなわち「参詩　能く奇語を作す。尤も辺塞に長ず」を引き、ひとまず筆を止める。

注

(1) 『唐会要』巻七五に「進士試雑文両首、識文律者、然後令試策」とあり、『文献通考』巻二十九に、進士科について「唐衆科之目、進士為大貴、而人亦最尚盛、歳貢常不減八九百人、縉紳雖位極人臣而不由進士者、終不為美」とある。

(2) 唐代では、科挙の進士に合格したもののうち、約半数が進士出身者によって占められている。唐代の宰相は四四六名であり、そのうち進士は二一三名である。詳しくは、拙著『唐代文学の研究』一六三ページ　笠間書院　昭和五十九年刊を参照。

(3) 『日本中国学会報』第十一集　一九六〇年刊　日本中国学会刊。

(4) 当時の長安の様子は、唐の韋述の『両京新記』・北宋の宋敏求の『長安志』・南宋の程大昌の『雍録』・元の李好文の『長安志図』を参照。

(5) 『人文学報』第三六集所収　一九六三年刊　東京都立大学。

(6) ペリオ文書　第二七四八号「沙州敦煌二十詠」　陽関戍詠には「遥瞻廃闕下、昼夜復誰局」とあり、もはや陽関が関所の役目をしていないことを詠んでいる。

補注

本論文中に於て引用した岑参のテキストは、四部叢刊本『岑嘉州詩七巻』を使用し、『全唐詩』巻一九八―二〇〇までの「岑参」によってこれを補った。

（教授　釧路分校）